

アベイラブルであること

Availability > Ability

国際基督教大学教会新入生歓迎礼拝, 2010年9月5日

鈴木寛*(教会員)

September 5, 2010

聖書 :

1 : ウジヤ王の死んだ年、わたしは主が高くあげられたみくらに座し、その衣のすそが神殿に満ちているのを見た。2 : その上にセラピムが立ち、おのおの六つの翼をもっていた。その二つをもって顔をおおい、二つをもって足をおおい、二つをもって飛びかけり、3 : 互に呼びかわして言った。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主、その栄光は全地に満つ」。4 : その呼ばわっている者の声によって敷居の基が震い動き、神殿の中に煙が満ちた。5 : その時わたしは言った、「わざわざいなるかな、わたしは滅びるばかりだ。わたしは汚れたくちびるの者で、汚れたくちびるの民の中に住む者であるのに、わたしの目が万軍の主なる王を見たのだから」。6 : この時セラピムのひとりが火ばしをもって、祭壇の上から取った燃えている炭を手に携え、わたしのところに飛んできて、7 : わたしの口に触れて言った、「見よ、これがあなたのくちびるに触れたので、あなたの悪は除かれ、あなたの罪はゆるされた」。8 : わたしはまた主の言われる声を聞いた、「わたしはだれをつかわそうか。だれがわれわれのために行くだろうか」。その時わたしは言った、「ここにわたしがおります。わたしをおつかわしてください」。9 : 主は言われ

た、「あなたは行って、この民にこういいなさい、『あなたがたはくりかえし聞くがよい、しかし悟ってはならない。あなたがたはくりかえし見るがよい、しかしわかってはならない』と。10 : あなたはこの民の心を鈍くし、その耳を聞えにくくし、その目を閉ざしなさい。これは彼らとその目で見、その耳で聞き、その心で悟り、悔い改めていやされることのないためである」。11 : そこで、わたしは言った、「主よ、いつまでですか」。主は言われた、「町々は荒れすたれて、住む者もなく、家には人かげもなく、国は全く荒れ地となり、12 : 人々は主によって遠くへ移され、荒れはてた所が国の中に多くなる時まで、こうなっている。13 : その中に十分の一の残る者があっても、これもまた焼き滅ぼされる。テレビンの木またはかしの木が切り倒されるとき、その切り株が残るように」。聖なる種族はその切り株である。

(口語訳 : イザヤ書 6:1-13)

讃美歌 : 讃美歌 537

この言葉との出会い

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。今日は一緒に“Availability”ということばについて考えてみたいと思います。

これは日本語に訳しにくいことばの一つです。英語のタイトルとした数式は“Availability is

*Email: hsuzuki@icu.ac.jp

†URL <http://subsite.icu.ac.jp/people/hsuzuki/>

greater than Ability.”と読みますが「いつでも用いられる状態にいることは、能力があることよりも大切だ」というような意味でしょうか。この不等式はわたしがおそらく高校3年生の頃、キリスト教の集会で聞いた言葉で、その頃学生服のポケットにいつも入れて持ち歩いていた聖書に書き記したものです。実はどんな文脈でこの言葉が登場したのか、どなたが話されたのかも全く覚えていません。

わたしはクリスチャン・ホームに育ちましたが、中学時代は教会から離れ、そして高校一年生の時のある事件をきっかけに真剣に神様の導きを求めるようになりました。ちょうどその頃、教会青年会で東南アジアに旅をすることになり、一年間アルバイトをしてお金をため、高校二年の夏休みに貨物船に乗って東南アジアを旅しました。そして高校三年生の頃、進路を考えながら、一方で、アジアの人とともに働きたいとの夢を持ちながら、また一方では、自分には大した能力もない、何の役にも立たないのではないかと考えてもいました。そんな時に聞いた「アヴェイラビリティはアビリティより大切だ」というこのことばが、非常に印象に残ったのだと思います。

常にアヴェイラブルでありたい

最近、大切にしているのは、学生さんをはじめ、わたしを訪ねてきて下さる方々に対してアヴェイラブルであることです。課題を出したときや、試験前などは質問も多くなるので、極力研究室を空けないようにしています。しかし授業とは関係の無いことで、質問に来たり、相談に来たり、ふらりと話しに来る学生さんもいますし「ちょっとここに座っていてもいいですか」と言って無言でしばらく座っていて、その日あったことをポツポツと話していく人もいます。学生さんだけでなく、先生方もいろいろなこと話に来られます。そこで、どんなときでも、誰に対しても、落ち着いて話しを聞き、応答できるような心の状態でありたいと願っています。みなさん歓迎ですから、いつでも訪ねてきて下さいね。

わたしだけでなく、仕事中でもいつもドアを半開きにして「いつでもどうぞ」と迎え入れて下

さる先生がICUには何人もおられます。わたしも、それに甘えて、通りがかりにちょっとおじゃまして話しをすることもあります。

あるときに、わたしは常にアヴェイラブルでありたいと願っている、と言いましたら、「そんなことをしていたらわたしなら消耗してしまうだろうし、第一、やらなければいけないことができなくなって、大変なことになってしまうのではないですか」と言われたこともあります。不思議とそんなことにはならないものです。

神様に対して

皆さんは「アヴェイラビリティ」ということばを聞いてどのような印象を持ちますか。

皆さんの中には、はっきりした夢を持っている方も、また、明確な夢がなくても、将来の自己実現のために、まずこのことを学び、このような力をつけ、その準備のために最大限今の時を用いたい、と考えている方もおられると思います。特に、交換留学など、海外からこのICUに来られた皆さんは、ICUで過ごす時に関してよりはっきりとした目的意識を持っておられるかも知れません。それは素晴らしいことですね。わたしもそのような方からそのような積極性とチャレンジ精神を学びたいと思います。

しかし、今日は、神様との関係を中心にして、一日一日、その時々をどう生きるかについて、ちょっと違った角度から考えてみたいと思います。

ちょっと唐突な質問ですが、イエス様があなたの前に来られたらどうでしょうか。みなさんはどうなさいますか。

わたしは、最初はいろいろとイエス様に聞きたいことを考えるかも知れませんが、やはり、イエス様に語って頂き、その言葉に応答しようとするのではないかと思います。アヴェイラブルであるとは「神様の召しにいつでも応答できるようにしていること」だと思います。具体的には誰かある人に対してアヴェイラブルであることを指す場合もあるかも知れませんが、今日皆さんと考えたいアヴェイラビリティは「その日、その時、神様に対してアヴェイラブルであること、神様の召しに応答していくこと」です。

イザヤの再献身

先ほどお読み頂いた聖書の箇所を見てみましょう。これは預言者イザヤの召命、すなわち神様に召された、呼び出された時の記事です。イザヤ書の最初におかれてはいないので、再召命をうけ、預言者として再献身したときのことを記しているのではないかと思います。

「ウジヤ王の死んだ年」と1節に書かれています。ウジヤ¹は紀元前8世紀の中頃南ユダ王国を治めた王で、歴代誌下26章の聖書の記述によれば、このウジヤ王は南ユダ王国の安定と繁栄を築き、主の目にかなうことを行なったが、晩年、清められた祭司たちしかすることのできない、神殿の祭壇で香を焚き、さばきをうけて重い皮膚病を患い、その後は隔離生活を余儀なくされたとなっています。

イザヤはこのウジヤ王の死んだ年に、神様の神聖さに触れて恐れおののき、自分は「汚れたくちびるの者」で滅びるしかない、罪の告白をします。預言者然として民に語っていた自分が、結局「汚れたくちびるの者たちに語るひとつの汚れたくちびるにすぎない」と自覚させられたのです。そのとき、神の使いにそのくちびるを清められ、罪の赦しを得、そして神の「わたしはだれをつかわそうか。だれがわれわれのために行くだろうか」という声を聞き、とっさに「ここにわたしがおります。わたしをおつかわしてください」と応答するのです。

このあと、イザヤ書のテーマとも言っても良いような神様の御心が告げられます。それはイエス様も引用しておられる²、「心を鈍くする」メッセージと、「切り株」です。正直、イザヤにも理解に苦しむ、恐ろしいメッセージだったのではないかと思います。

安定し繁栄を享受していた民、高慢から神殿で香を焚き重い皮膚病を患ってしまった王も死に、善良なウジヤの子³が正式に王に即位すると言うときに、信じられないメッセージです。しかし、イザヤはこの時から、ずっと、神様からの命令をその言葉通りに実行し、そのときどき

に与えられたメッセージを神様のことばとして語り、書き記し、神様の召に忠実に生きていきます。

神様からのメッセージを受け取ること

神様に対してアヴェイラブルであるということは、このイザヤのように、もしくは預言者のように、日々神様からのメッセージに預かること、受け取ることだと思います。神様からのメッセージは単なる言葉では無いこともあるでしょう。それは、ある事件を通して得られることも、新しい真理との出会い、他者との出会い、異質な世界との出会いを通して、真理の深さ、神様が愛されるひとびとの多様さとして知らされることもあるでしょう。また、ある方の働きを通して、神様の働きを見ることもあるでしょう。イザヤのように、理解に苦しむメッセージと出会うこともあるかも知れません。しかしわたしたちは神様のものであり、わたしたちの理解力や実行力を越えて働いて下さる神様の素晴らしさ信じて、そのメッセージを受け取ります。

実験場としての ICU

このICU教会は「国際基督教大学の宗教生活および教育の完成をたずける」ことを目的の一つとして大学の献学とほぼ同時にスタートしました。ICUの開学は1953年ですが、それは鎖国をしていた日本にアメリカ合州国のペリー提督が艦隊を率いて浦賀沖に来た1853年からちょうど100年後の事でした。その開学の年の、大学要覧には、次のようにあります。

過去百年の歴史を顧みるに、科学技術の進歩は時間を縮め空間を狭めて人類相互間の関係を愈々緊密ならしめはしたが、教育の分野に於いては時代の進展に伴う複雑多岐な問題を解決するに足る進歩を遂げていない。諸民族は地球上に隣接して住み乍ら友好関係には立っていないのである。

かゝる文明の危機を背景として、本学は国際協力のもとに設立され、国際文

¹列王記下14, 15ではアザリヤ

²マタイ13:13-15, マルコ4:12

³ヨタム

化と理解への実験場として独自の国際社会を学内に実現し、世界共同体の可能性を立証せんとするものである。

ICU Bulletin 1953-1955

この文章によれば、地球上の「諸民族」は「隣接して住みながら友好関係に立っていない」とし、20世紀前半に二度の世界大戦を引き起こしてしまった人類の危機を背景として、国際協力のもとで「複雑多岐な問題を解決する」人材を育成するために、この大学を設立し、さらに「国際文化と理解への実験場として独自の国際社会を学内に実現し、世界共同体の可能性を立証する」としています。

すごい大学だと思いませんか。正直、わたしは、このような大学に教員の一人として召されていることをこころより感謝しています。ICU教会の目的の最初には「神を求め神に仕えるものが、あらゆる立場のキリスト者よりなるフェローシップをつくること」とあります。「あらゆる立場のキリスト者よりなるフェローシップ」という言葉の中に創立者達の意思が現れていると思います。

開学から57年たった今、ICUが「世界共同体の可能性を立証する」実験場としての営みを日々真摯に続けているかは皆さんに判断していただくこととしましょう。

実験は、当然ながら、われわれが真理に到達していないからこそ行うものです。実験はあることを意図して行うことは事実ですが、結果がどうなるかわからないだけでなく、殆どは失敗です。しかし少しずつ違う条件でくり返していくと、想像もつかなかった結果が、あるときには偶然得られ、それを柔軟性をもって受け止めていく中で、真理に近づき、予想もしていなかった驚くべき結果に到達する道を見つけ出すのです。わたしの研究分野は数学ですが、数学の研究においても、真理の探究の営みはこの実験と殆ど同じです。

日々新たにされるため

今日は、アヴェイラビリティーについて考えてきました。わたしは、「世界共同体の可能性を立

証する」実験場として建てられたこの大学だけでなく、わたしたちも日常生活の中で実験に近いことをしているのではないかと思います。

神様がこのわたしをも愛して下さっていることを知り、神様がわたしを愛して下さっているのと同じように愛しておられるわたしの隣り人を愛するよう招かれていることを知る。しかし、自分の罪と弱さ故に互いに愛し合うことができない。その葛藤の中で、失敗をくり返しながらわたしたちは生きています。しかしその中で神様の導きをちらっと見る。そんな営みを続けているのではないのでしょうか。

神様に対してアヴェイラブルであることは、神様からのメッセージを受け取り、神様に用いていただくように自分自身を差し出すことであると同時に、神様が導いて下さる人に、そして真理に出会うことによって、わたしたちを神様に造り変えていただくことなのではないかと思います。

つねに自らを神様の前に置き、柔軟なこころを持って神様の声に耳を傾けながら、その声にイザヤのように応答していく者でありたいと思います。神様は、そのようなわたしたち一人一人に真理を示し、わたしたちの足りないことを補いながら用い、そして日々新たな人に造り変えて下さいます。

祈ります。

祈り

神様、どうぞわたしたちを憐れんで下さい。そして、わたしたちがつねにあなたに対して心を開き、あなたの召しに応答していくことができるように導いて下さい。そして「何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心から働(きなさい。)⁴」くことができるように力を与えて下さい。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。
アーメン

⁴Col. 3:23